



Data

監督:サイモン・カーティス
 出演:ミシェル・ウィリアムズ/ケネス・ブラナー/エディ・レッドメイン/ジュリア・オーモンド/ダグレイ・スコット/ジュディ・デンチ/ドミニク・クーパー/エマ・ワトソン/ゾー・ワナメイカー/トビー・ジョーンズ/デレク・ジャコビ

👁️👁️ みどころ

セックス・シンボル、モンロー・ウォーク、ケネディ大統領との情事。ハリウッド女優マリリン・モンローにはそんなイメージが強烈だが、イギリスの名優ローレンス・オリヴィエと共演した『王子と踊り子』(57年)の撮影風景に見るその演技力は？

本作はその撮影中におけるマリリンとサード(第3助監督)を務めた23歳の男性との淡い恋(?)を描くもの。その停さの中に垣間見えるマリリンの少女のような実像とは?『ローマの休日』(53年)で観たアン王女と新聞記者との淡い恋(?)と対比しながら、マリリンの「実像」に迫るのも一興・・・。

マリリンは、名前は知っていても遠い存在?

本作はローレンス・オリヴィエ(ケネス・ブラナー)が監督し共演する映画『王子と踊り子』の撮影のために、ハリウッドの大女優マリリン・モンロー(ミシェル・ウィリアムズ)が1956年にイギリスに渡った時の7日間の恋を描く物語。1949年生まれの子がマリリン・モンローの名前を知ったのは、中学生になり1人で3本立て55円の映画館に通うようになった時からだが、さすがに『王子と踊り子』(57年)は知らない。しかし、『紳士は金髪がお好き』(53年)『百万長者と結婚する方法』(53年)『帰らざる河』(54年)『7年目の浮気』(57年)などマリリン・モンローが主演した映画のタイトルはよく知っていたし、モンロー・ウォークや1960年にはジョン・F・ケネディ大統領と不倫の関係にあったことなども、中高一貫教育の男子校にありながらよく知っていた。

しかし、それはあくまで活字や雑誌からの情報で、実際にスクリーン上でマリリンを見

てそのセクシーさに参ったという経験はなかったから、マリリンはあくまで遠い存在。また、マリリン・モンローのようなセックス・シンボルよりは、ナタリー・ウッドやオーディリー・ヘップバーン、さらに『隊長ブルーバ』(62年)のクリスティーン・カウフマンのような知性派美人の方が自分の好みにピッタリ・・・？

50年前の淡い恋(?)が、今なぜ復活を？

マリリン・モンローが36歳の若さで死んだこと、その死が謎に包まれていることは周知の事実だから、マリリンの女優や歌手としての才能とそのスキャンダラスな生きざま・死にざまに焦点を当てた映画も面白いと思うのだが、本作はその正反対で、マリリンが30歳の時に経験したたった7日間の淡い恋(?)の物語に焦点を当てている。

サイモン・カーティス監督が注目したのは、ローレンス・オリヴィエから『王子と踊り子』の「サード」こと第3助監督に指名された、当時23歳の若者コリン・クラーク(エディ・レッドメイン)がドキュメンタリー作家として成功を収めた後に書いたマリリンとの仕事と恋に迫った2冊の回顧録。すごい名家の血筋にもかかわらずどうしても映像関係の仕事をしたかったコリンは、押しの一手でローレンス・オリヴィエからサードの地位を獲得。そのため、『王子と踊り子』の撮影中はサード=便利屋としてマリリンの世話をすることに。撮影中は何かと気難しいローレンス・オリヴィエと衝突し、その度に演技コーチのポーラ・ストラスパーク(ゾー・ワナメイカー)によって守られていたマリリンが、少しずつ優しくして大らかなコリンに対して心を開いていったのも当然。

他方、世紀の大スターと身近に接することになったコリンが誠心誠意マリリンに尽くしたのも当然で、それが一層マリリンの心を開かせたのも事実のようだが、果たしてそれは恋と言えるもの？現に撮影が終わると、コリンは1週間でポイと捨てられてしまったのでは・・・？そんな根本的な疑問があるものの、『ローマの休日』(53年)におけるアン王女と新聞記者との数日だけ淡い恋と言えないわけではないから、まあいいか・・・。

扱いにくい女優の典型！でもその繊細な内面は？

日本でも「わがまま女優」「ブツン女優」と悪評のたつ女優がいつも存在するが、『王子と踊り子』の撮影風景に見るハリウッド女優マリリン・モンローはまさに扱いにくい女優の典型！役づくりや映画づくりのためには努力を惜まず、常に合理的な思考方法で全力を尽くすローレンス・オリヴィエにとって、演技コーチのポーラ・ストラスパークにピッタリと寄り添われ、状況設定に納得できなければ役づくりができず、まともなセリフも出てこないというマリリンのような女優ははじめてだったらいい。そのうえ、遅刻や無断欠席はしょっちゅうだから、その度にローレンス・オリヴィエがイライラしたのは当然。そんな撮影風景が続く中、彼は『王子と踊り子』の完成までよく我慢したものだ。

イギリスの名優ローレンス・オリヴィエとの共演というプレッシャーと闘いながら、そ

れまでのセックス・シンボルから「演技派」への脱皮を目指していたマリリンの心の中が日々不安に揺れ動いていたのは当然だが、そのことと他の共演者に迷惑をかけることは全く別。私もローレンス・オリヴィエと同じでそう考えてしまうが、もう1人の共演したベテラン女優シビル・ソーンダイク（ジュディ・デンチ）はあくまでマリリンに優しかった。日本でマリリンのような女優を挙げれば、さしずめ秋吉くみ子や桃井かおりで、決して柴咲コウや沢尻エリカではないと思うが、どちらにしても扱いにくい女優であることはたしかだ。しかし、その魅力を映画の中で最大限発揮するためには、周りがすべて彼女の繊細な内心に合わせ彼女の直感的な演技を引き出すことが不可欠！



『マリリン 7日間の恋』3月24日(土)全国ロードショー

配給：角川映画 © 2011 The Weinstein Company LLC. All Rights Reserved.

やはり分相応が大切！本命の恋の展開は？

コリンは若くてハンサムだから、恋人なんていくらでも……。現にコリンは撮影が始まるとすぐに、身持ちが固そうな(?) 衣裳係のかわいい女性ルーシー（エマ・ワトソン）に対してほどよいアタック(?) をかけ、順調に交際をスタートさせていた。すると、マリリンの見張り役は仕事としてやりつつ、プライベートでは分相応なルーシーとの恋を成就させていくのがベスト。誰が見てもそう思えるし、現にマリリンのビジネス・パートナ

ーであるミルトン・グリーン(ドミニク・クーパー)やマリリンの運転手であるアーサー・ジェイコブ(トビー・ジョーンズ)らはそのようにコリンにアドバイスしていた。ところが、ハリウッド女優マリリン・モンローではなく、一方では演技や人間関係にもだえ苦しみ、他方でコリンの前では文字どおり素っ裸になって池の中で泳ぐ子供のような心を持ったマリリンに恋をしてしまったコリンは、今やルーシーのことなど眼中になくなってしまっていた。マリリンとの2人だけの恋が進行し、その中で2人だけが共有する秘密が次々と拡大していくコリンだったが、『王子と踊り子』の撮影が終わり、マリリンがケンカ状態になっていた夫である作家のアーサー・ミラー(ダグレイ・スコット)の元に帰ることになると・・・。

コリンのそんな様子をルーシーはしっかり観察していたが、さてマリリンとの7日間の恋が終わった後、コリンはルーシーとの本命の恋をしっかり修復できるの?映画はラストにその後のマリリンの生き方の他、コリンの生き方もナレーションで語ってくれるが、ルーシーとの恋の行方については何も語らない。しかして、コリンにとって本命であったはずのルーシーとのその後の展開は?

アカデミー賞主演女優賞の行方は?

第84回アカデミー賞主演女優賞は、『マーガレット・サッチャー 鉄の女の涙』(11年)のメリル・ストリープと本作のミシェル・ウィリアムズが激突!それに『ドラゴン・タトゥーの女』(12年)のルーニー・マラが絡むというのが大方の予想で、大本命はメリル・ストリープ。

ミシェル・ウィリアムズは前作『ブルーバレンタイン』(10年)で演技派女優としてすさまじい夫婦ゲンカぶりを見せてくれた(『シネマルーム24』31頁参照)が、本作ではローレンス・オリヴィエとの確執の中で打ちひしがれるマリリンと、コリンとの淡い恋の中で自由奔放にかわいい面を見せつけるマリリンの両面をうまく演じ分けている。さらに、モンロー・ウォークの訓練はもとより、風呂場のシーンや大胆なヌードを見せる池の中のシーンの魅力もバッチリ。もっとも、そんな努力にもかかわらず、やはりサッチャー首相を演じたメリル・ストリープの存在感は圧倒的だから、賞レースはやはりメリル・ストリープの勝ち。私はそう予想したが、さてあなたは?

2012(平成24)年2月18日記